

本年のまとめと来年への希望 その6

400号にたどり着きました。こうなると450では中途半端なので、500を目指してまいります。

今に至って、中村雄二郎の「哲学の現在」を読み込んでおります。この文章の冒頭の部分を何度も読み返し、今年の自分を振り返る一助としております。

生きること考えること

(昨日からの続き)

よく考えとかよく生きるとかいうのは、それ以上の、充実感のうちに積極的に考え、手ごたえのあるかたちで生きることだろう。

誰でもすぐ思いあたるはずだが、私達は必ずしも、順境のうちで充実感をもって生きたり考えたりするものではない。むしろ、順境の中に安住することは、人間として生きることの放棄にさえなるだろう。順境とは、より大きな冒険のための、また挑戦のための場所とするべきものなのだ。そうなればもう、安住の場所としてのいわゆる順境ではない。もちろん、逆境の中で私たちはもっと追いつめられ、切羽詰まった立場におかれる。自ら好んで逆境を求める必要はないが、逆境におかれることのまったくない人はほとんどいないだろう。

私たちは、逆境におかれるとき、環境や状況をのりこえようとすれば、否応なしにそれらとの対立や緊張の関係におかれ、障がいとして立ち向かわざるをえなくなる。そういうときに私たちは、しばしば、自分でもそれまで気が付かなかった力を発揮し、絶対的なものだとばかり思っていた障がいがそうでなくなるのにおどろく。そういうときに私たちは充実感をもつし、充実感のなかでさらに力が発揮されるだろう。よく考え、よく生きるとは、考えることや生きingことをどんな障がいの中でも悦びにかえることでもあるのだろう。

生きることと考えることを顧みることは、古くてしかも新しいとする筆者は、生きることと考えることは絶えずよみがえり、現前するとも述べている。そして、何よりも必要なことは、よくよみがえらせ、現前、現存させることだとも述べる。その試みを「哲学の現在」と定義する。

常に哲学を現前させ、新しい命題によみがえらせ、自分を見つめていくことこそが、自分の命題であるとするのだ。

年の瀬にあたり、このことをもう一度胸にとめ、重なり行く時間の中に新しいものを見出していくことができるなら、なんという幸せなことであるだろうと推察する。

除夜の鐘をききながら、一年を振り返りつつ、よく生きることとよく考えることをもう一度振り返りたいと思います。